

SFC ディスカッションペーパー
SFC-DP 2011-004

ファカルティ・デベロップメント (FD)
の理念と実践的提案

岡部光明

慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科非常勤講師
明治学院大学国際学部教授、慶應義塾大学名誉教授

okabe@kvp.biglobe.ne.jp

2011 年 11 月

ファカルティ・デベロップメント（FD）の理念と実践的提案*

岡部光明

【要約】

ファカルティ・デベロップメント(FD)とは、大学教員が授業の内容や方法を改善し向上させるための組織的な取組みの総称であり、2008年度以降、大学はそれを実施することが義務づけられた。このため近年、にわかに関心が高まる一方、関係者の間では戸惑いもみられる。本稿では、FDを肯定的に捉える見解とそうでない見解を対比して整理するとともに、FDの意図を活かすにはどう考えれば良いか、そして具体的にはどういうことが可能かにつき、筆者のこれまでの経験を踏まえつつ論じた。その結果(1)FDは大学としてそれを行っているという実績を示すこと自体に意味があるのではない、(2)教員が自発的に取り組むことによってこそ実効性が高まる、(3)大学ないし学部は教員がそうした取り組みをしやすい環境を整える必要がある、などを主張した。

はじめに

最近、日本の大学関係者の間でもっとも頻繁に口に出る言葉の一つは「FD」すなわちファカルティ・デベロップメントである。FDとは「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組みの総称」（「21世紀の大学像答申（平成10年）」）である。FDは、大学にとって従来は「努力すべきこと」とされていたが、2008年度からはその実施が義務づけられた（大学設置基準の改正）。このため近年、にわかに関心が高まっている。それと同時に、大学関係者の間には戸惑いもみられる。

大学教員が授業の内容や方法を改善し、向上させることが望ましいことはいままでもないことであり、またその必要も大きい。ただ、FDにはどのようなことが含まれるのか。また大学として、あるいは大学教員としてFDにどう対応して行くべきか。こうしたことを明ら

* 本稿は、著者が明治学院大学国際学部に着任した時（2007年9月）に、今後重要化するファカルティ・デベロップメント（FD）を学部活動として支援してほしいとの要請を阿部望学部長からいただいたことを執筆動機とするものである。本稿の内容は、金沢星稜大学において教員向けFDセミナー（2011年11月）で発表することができた。その機会を与えてくださった同大学の隅田和人准教授に感謝したい。本稿は明治学院大学『国際学研究』第41号（2012年3月刊行）に掲載される予定である。

かにして対応していかなければ、FDは大学教員の本来の職務を妨げかねない問題を含んでいるようにみえる。そこで本稿は、これらの点を整理するとともに、大学における良い授業とはどのようなものかについての筆者の見解を述べるとともに、実践していることを幾つか紹介したい（後者の中にも「盗んでみたい」という教育方法があればぜひそうしていただけると筆者としては幸いである）。

以下第1節では、FDをどう捉えるかにつき2つの対立的見解を紹介するとともに、FDに関する私見を述べる。第2節では、FDを考えるに先立って大学教育には重視すべき三本柱があることを主張する。第3節では、大学教育の方法について5つの問いを立て、筆者なりにその答えを与える。第4節では、より良い授業を行うために筆者が実行し、学生諸君から評価を得ている5つの原則を紹介する。第5節は、短い結語である。

1. FDをどう捉えるか—2つの対立的見解、そして私見

FDにはどのようなことが含まれるのか。いま各種の報告書、例えば大学コンソーシアム京都（2011）などによると、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、外部講師を招いての講演会、大学外FD関連集会への参加、新任教員あるいは専任教員のための研修会の開催、授業改善のヒント集作成など、実に多様な活動が挙げられている。

FDが2008年度以降義務化されているということは、大学が外部機関（大学基準協会）によって認証評価を受ける際にこれが一つの必須評価項目となったことを意味する。このため、大学ないし大学教員に対して上記のような活動が義務づけられたことを意味する。FDに関するこの実情をどう考えるか。各種見解を分類して整理すれば、以下のような2つの対照的な見方になろう（**図表1**、**図表2**）¹。

[FD賛成論]
・ 大学教員は「教育方法論」を履修していないので意味が大。
・ 授業の善し悪しは教員間で大差があるのでFDは役立つ。
・ 大学教員が多様化している(実務家教員の増加など)ので授業の質確保に役立つ。
・ 大学にとって学生は「顧客」であるから顧客ニーズを満たす努力は当然。
・ グローバル化によって日本の大学における授業の質が問われるので妥当。

図表 1

[FD反対論]
・ 大学教員はそれぞれの見識で授業をしているはずだからFDは屈辱的。
・ FD義務化は結局、形式的対応(アリバイ作り)をもたらし実効性は期待薄。
・ FDは大学教員をさらに多忙化・疲弊化、教育研究活動に弊害。
・ FDは文科省役人の責任回避を意図した規制強化であり大学の本質に背馳。
・ FD義務化は教員の授業改善意欲をむしろ低下させる可能性。

図表 2

¹ 以下の記述は、岡部（2011a：4部3章）に依拠している。

F D賛成論

- ・大学教員は「教育方法論」を履修していないのでF Dの必須化は意味がある。
- ・授業の善し悪しは教員間で大差があるので、F Dは後者を改善する上で役立つ。
- ・大学教員像が多様化（実務家教員が増加）しているので授業の質確保に役立つ。
- ・大学にとって学生は「顧客」であるから顧客ニーズを満たす努力は当然である。
- ・グローバル化の下では日本の大学における授業の質が問われるので妥当である。

F D反対論

- ・大学教員はそれぞれ見識をもって授業をしているはずだからF Dは屈辱的である。
- ・F D義務化は結局、形式的対応（アリバイ作り）に終わる可能性が大きく実効性を期待できない。
- ・F Dは大学教員をさらに多忙化・疲弊化させ、教育研究活動に弊害を生む。
- ・F Dは文科省役人の責任回避を意図した規制強化であり大学の本質に合致しない。
- ・F Dの義務化は教員の授業改善意欲を向上させるのではなく逆に低下させる。

F Dに対する私見

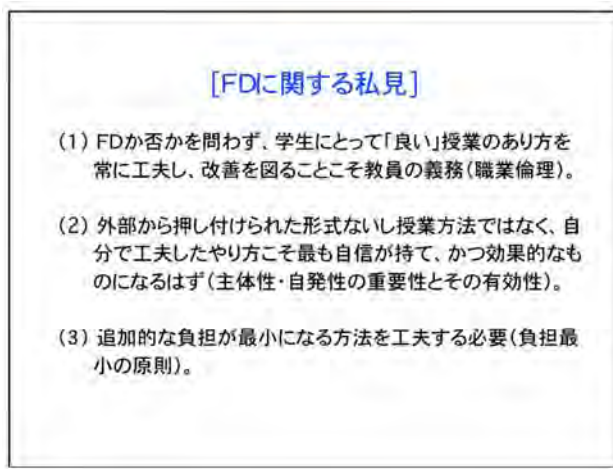
上記の賛否両論はそれぞれもつともな面がある。筆者は教育論の専門家ではない（専門は金融論、経済政策論である）が、これまでに実務経験および国内外の大学ないし大学院での教育研究経験が少なくなく²、またそれを踏まえて大学教育に関する書籍も何点か刊行している³。こうした経験を踏まえると、F Dは次のように理解し、そして行動するのが良いと考える（図表3）。

第1に、F Dが求められるか否かを問わず、学生にとって最も「良い」授業のあり方を常に工夫し、改善を図ることこそ教員の義務であることを再認識することである（職業倫理）。第2に、そうすれば、外部から押し付けられた形式ないし授業方法ではなく、自分で工夫したやり方こそ最も自信が持て、かつ効果的なものになるはずである（主体性・自発性の重要性とその有効性）。そして第3に、われわれにとって追加的な負担が最小になる方法を工夫

² 筆者は、1968-1990年の間日本銀行に勤務した。その後、1990-1991年には米国ペンシルバニア大学（経済学部、大学院）客員講師、1991-1992年に米国プリンストン大学（公共政策大学院）客員講師、1992-1994年に豪州マックオリー大学（経済金融学部）教授を務めた。その後、1994-2007年には慶應義塾大学（総合政策学部、大学院政策・メディア研究科）教授、そして2007年以降現在まで明治学院大学（国際学部、大学院国際学研究科）教授を務めている。

³ 『大学院生へのメッセージ 未来創造への挑戦- 』、『大学生へのメッセージ 遠く望んで道を拓こう- 』（日本図書館協会選定図書）、『私の大学教育論』、『大学生の条件 大学教授の条件』（以上、慶應義塾大学出版会）、『大学教育とSFC』（西田書店）。

する必要があることである（負担最小の原則）。



図表 3

つまり、義務だからやらざるを得ないという発想（その場合には負担感だけが残る）を排する一方、むしろFD義務化を奇貨として自発的に、そして各大学ないし各教員が独自の方法で取り組むのが望ましい、と考える。これに伴い、ある程度の負担増加はやむを得ないと割り切る必要があるが、今後もし形式的、統一的なFD要請があった場合には「われわれは既に独自のFDを行っている」と胸を張って主張すればよく、そうした外圧が到来する前に先手を打っておくのが得策ではないだろうか。

2. 大学教育の三本柱

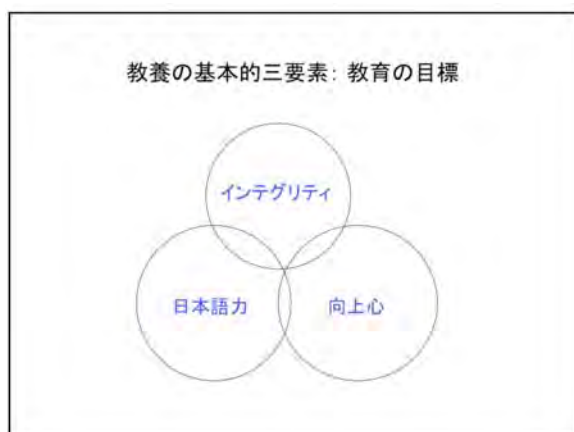
FDのあり方を論じるに先立ち、まず大学教育は何を目指すべきかを明確にしておく必要がある⁴。

大学教育の目標としては、最近「社会人基礎力」とか「学士力」といった新しい言葉が頻繁に登場している。そして、それを構成する要素として「考える力」とか「コミュニケーション能力」といった様々な力量が列挙される場合が少なくない（岡部 2009、184 ページ）。その数が多ければ多いほど望ましいといった趣すらうかがえるが、筆者はそうした発想にやや違和感を感じる。

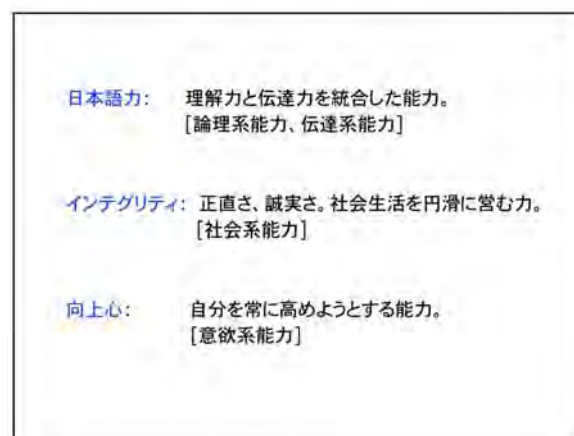
確かに、目標を数多く列挙すればするほど議論は安全なものになる。しかし、教育の本質を考えるうえでは、何が核心に位置する要素なのかを見きわめることこそ重要ではないか。筆者は、大学の学部教育の基本は「教養」を身につけることであると考えている。ここでい

⁴ 以下は岡部（2011：3部1章）に依拠している。

う教養とは、単に知識の豊富さ、あるいは目先の問題に対してすぐに役立つ技量をいうのではなく「一般性の高い人間としての幅広い力量」である。つまり、教わった知識を全部忘れてしまったときにその人に残るもの、それが教養であり、大学教育の目標はまさにこの点にあるべきだという考え方である。



図表 4



図表 5

大学教育の三つの目標

そうした目標は三つの要素からなる、と筆者は整理したい（図表 4）。すなわち日本語力、インテグリティ、向上心、この3つである。日本語力とは、理解力と伝達力を統合した能力に他ならない。インテグリティは、正直さ、誠実さであり、社会生活を円滑に営む力という側面を持つ。そして向上心とは、自分を常に高めようとする能力である。これら三つの詳細は別途論じた（岡部 2009）が、日本語力と向上心は比較的分かり易いのに対して、インテグリティという表現は日本では未だ一般化していない。しかし、これは教育が目指すべき三本柱の一つであるだけでなく、国際性を持つ目標でもあるので、以下ではインテグリティに絞ってその意義や必要性の理由などを述べたい。

なお、大学教育の目標を上記三要素として理解するのが適切であるという意見は筆者独自のものであり、筆者が知る限り他に全く見当たらないが、ごく最近、ある教育学研究者が教養を論理系能力、伝達系能力、意欲系能力の三つの基礎能力として指摘していること（金子 2007）を知った。後者の分類を援用するならば「日本語力」は論理系能力と伝達系能力を合成したものとすることができ、また「向上心」は意欲系能力にほかならない。そして「インテグリティ」はいわば社会系能力とすることができる（図表 5）。したがって、筆者が指摘した三要素は、この研究者による分類を包括する（それをさらに拡充する）ものであるうえ、より具体的な力量として表現している点で一層理解しやすいのではないかと考えている。

インテグリティの意義、それを重視するプリンストン大学

インテグリティとは「言うことと行うことが一致していること」である。つまり言行一致であり、両者が一体化しているという意味で完全性を意味する。われわれは、口では良いことを言っても実際の行動がそうになっていない場合が少なくないが、そうではなく両者が一致していること、それがインテグリティである。そして重要なのは、他人が見ていようが見ていまいがその姿勢が貫かれていることだ。人が見ている場面では言行が一致していても、人が見ていないところではそうでないケースがありがちだが、そうではなく人の目が届かないところでも言うことと行うことが一致していること、これがインテグリティの重要な側面である。

これは、社会を構成員する個人にとって最も重要な倫理的基準のひとつであり、それが行き渡っているのが良い社会だと考える。筆者がその重要性にほんとうに気づいたのは約20年前、米国の名門プリンストン大学で1年間教壇に立った時である。そこでインテグリティという意味の深さを初めて知るとともに、同大学ではその重要性を教育の根幹として据えていることを知り、強い衝撃を受けたのを思い出す（岡部 2005、2006b:1部1章および2章）。

プリンストン大学では、期末試験に際して何と試験監督を置かずに試験を実施している。期末テストの際、教員は試験問題と解答用紙を試験教室で配布し、自分の研究室に戻る。そして試験時間（2時間程度）の終了を見はからって、再び教室に現れて答案を回収し、それを持ち帰る。つまり、試験監督が誰もいない状態で期末試験が行われるわけである。こうした試験を公明正大に行うため、学生は「不正行為をしていないことを私の名誉にかけて誓います」⁵という誓約文を答案に自筆で書いて署名することになっている。このためこのシステムは「名誉ある宣誓制度」（honor system）と称されている。

ここでは、不正は人格を損なうという考え方が強調されており、現に教育において学生がそれを身につけるように制度的対応がなされている。すばらしい勇気あるシステムといえるのではなかろうか。プリンストン大学の詳細は（岡部 2005、2006b:1部1章-2章）を参照。

なぜインテグリティが大切なのか

では、なぜインテグリティを重視すべきなのか。それは第1に、インテグリティを基礎とした行動をしていれば、何も言い訳をする必要がないからである。つまり、他人の目を不必要に気にかけることがなくなるので自主性が高まり、その結果、より良い判断ができるようになるからだ。第2に、インテグリティは責任を持って行動することを意味しているので、第三者からの信頼感が高まり、自分にとって喜びになるからである。第3に、インテグリティ

⁵ “I pledge my honor that I have not violated the honor code during this examination.”

イを生活の基準におけば、込み入った日々の生活を単純化できるというメリットがあり、毎日の生活に自信をもたらしてくれるからである。

さらにインテグリティは、国際性、普遍性のある価値であることも付け加えておきたい。例えば、国際機関の代表的存在である国際連合は3つの基本的価値を掲げているが、その一つとしてインテグリティがうたわれている。すなわち国連における3つの価値とは、専門的能力 (professionalism)、インテグリティ (integrity)、多様性の尊重 (respect for diversity) であり、国連の幹部職員を全世界から公募する場合、この3つを充足する人であることを強調しているのが印象的である。

インテグリティの重要性は、組織についても同様に当てはまる。企業の経営が誠実性をもってなされていない場合には、多くの事例が示すとおり企業の命取りになる場合もある。

なお筆者も、学生に対してインテグリティの大切さを理解してもらおう努力している。一つは、タームペーパー (学期論文) の提出に際しては、表紙下方に「無断引用など不正がない」旨を書かせて署名させていることである。もう一つは筆者の授業中に即答できないような質問が学生から出た場合、分からない旨を率直に述べる (いい加減な答えをしてごまかすといったことはしない) とともに、自分が納得するまで調べたうえできちんと回答するようにしていることである。これらはほんの小さい実践にすぎないが、大学教員として必要な努力は今後とも重ねて行きたいと考えている。

3. 大学教育の方法論—5つの問い、その答え

大学教育における上記3つの目標を達成するには、どのような教育方法によればよいのだろうか。ここでは、比較的頻繁に議論される5つの論点を取り上げて筆者の考え方を述べることにしたい。いずれの問いについても、その解答は上記3つの基本目標に照らして判断される必要があること、そして、解答は必ずしも白か黒かに断定できるとは限らない (その両面を持つケースもある) ことに予め留意しておきたい。

5つの論点とは、(1) 授業においてパワーポイントを使うか、それとも板書によるか、(2) 教材資料はインターネット上で公開するか、それとも教室で配付するか、(3) ものごとを義務づけて行わせるか、それとも本人のインセンティブ (行動動機) を活用するか、(4) 成績評価は期末テストによるか、それともレポート提出によるか、(5) 教員にとって最大の任務は教育か、それとも研究か、この5つである。

(1) パワーポイントか、板書か

大学の講義においては、プレゼンテーション用ソフトウェアであるパワーポイントを利用して行う場合が近年非常に増えている。教育活動においても、様々な面で情報通信技術 (I

CT)の進歩を活用するのは当然である。しかし、大学での講義（ここでは学部レベルの授業を念頭におく）においてそれが無条件に（あるいは深い考慮のないまま）それが使われているとすれば（筆者にはそうしたケースも少なくないように思われるが）、それには一考の余地があるように思われる（**図表6**）。

学部教育におけるパワーポイントの使用	
【利点】	
1)	教材作成が簡単、多様な資料を活用可能
2)	教材や資料の編集や改編が容易
3)	カラフルで美しいものを提示可能
4)	ネットワーク接続により時間的・空間的に飛躍可能
【問題点】	
1)	情報過多（必要以上に盛り沢山の情報を提供）
2)	思考スピードの無視（早すぎる画面繰り出し）
3)	没個性（一見きれいだがあくまで機械による美しさ）
4)	学生を受け身にさせるリスク（学生との緊密なインターアクションを阻止）

図表6

まず、パワーポイントを用いた講義（より広くインターネットに接続したスクリーンを用いた講義も含めて考える）の利点は少なくない。すなわち（1）教材作成が簡単であり、多様な資料を活用できること、（2）教材や資料の編集や改編が容易であること、（3）カラフルで美しいものを学生に提示できること、（4）教員が講義をする場合の身体的負担を（板書する場合に比べて）大幅に軽減できること、そして（5）ネットワーク接続している場合には時間的・空間的に飛躍した内容を提示できること、などを指摘できる。

一方、パワーポイントの問題点もある。すなわち（1）ともすれば過大な情報（必要以上に盛り沢山の情報）を提示しがちになること、（2）画面の繰り出しが早すぎて学生の思考スピードにマッチしない可能性があること、（3）機械によって作成した画面であるため美しさはあるが没個性的になる（板書の場合にある手書きの暖かさには欠ける）こと、そして最も深刻なのは（4）学生を受け身にさせるリスクがあること（聞くことによって分かった気分にしてしまうこと）、などである。

こうしたメリットとデメリットは全体としていずれが大きいと見るかは、各種の条件（例えば講義の内容やレベル、学生数、教室環境、機器の映像精度など）にもよるので一概に言いえないが、筆者の経験に照らした場合、学部授業に関してはパワーポイントよりも、旧来の授業メディア（板書、紙ベース資料の配布）の方が優れた授業手段だと判断している⁶。パワ

⁶ 詳細は、岡部（2000：1部3章）を参照。なおその内容は「最適授業メディア私論」としてウェブに

ーポイントが世の中に普及しても、大学（学部）において板書は依然として優れた教育手段であることを再認識すべきだと考える。教育は画一的なコンビニの弁当によってではなく、やはり手作りの料理によってなされる必要がある、とでもいえようか。

なお、板書をする場合には留意すべき重要な点があることを意識し、それを実行することが必要だと考える（後出の図表7を参照）。第1に、黒板は秩序立った使い方をすること（左から右へ、上から下へ書くこと）である。第2に、文字はたとえ下手な筆跡であっても楷書で大きめの文字で書くことである。第3に、チョークは白色のほかカラーチョークも適切に使って論理や重点を明確にするよう配慮することである。

もう一つ付言すれば、上述したように学生の日本語力（話す力、書く力、聞く力）を向上させることが大学教育の3本柱の一つであり、そのためには教員の格別大きな、そしてそれを強く意識した努力が求められよう。とくにゼミナールなど学生と対面し、口頭でやり取りする場面の多い授業において教員の責任は大きい。教室における討論や口頭でのやりとりにおいては、明快さ(clarity)、正確さ(precision)、効率性(efficiency)、そして品位(decency)を持った日本語での会話が成立するよう、教員は学生を指導することが期待される（岡部2009:191-200ページ）⁷。

(2) 資料のウェブ公開か、教室配付か

教材ないし資料はウェブに掲載して公開するのが良いか、それとも教室で配付するのが良いか。

教材あるいはレジメ（講義の要約）をウェブに掲載して公開し（必要ならばアクセスできる者を限定したうえで公開し）、学生がそれをいつでもダウンロードできるようにしておけば学生にとって非常に便利である。また教員にとっても、資料を学生数だけコピーする手間が省けるし、紙資源の節約にもなる。

一方、学生はいつでも資料を入手できることになるので講義に出席する意欲とその必要性を減退させるというマイナス効果を持つ。そして、何よりも教室での対面授業の緊張感ならびに集中度の高さをウェブ情報は補うことができない。この点、教室における資料配付は、

も掲載してある (<http://www.okabem.com/essay/index.html>)。筆者は、学部授業ではこの20年間、後述するように原則としてパワーポイントを使わず全て板書と1枚の配付資料を中心に行ってきた。なお、大学院や学会での研究発表に際しては、むしろパワーポイントを積極的に活用している。効果的なパワーポイント利用方法は、岡部(2011b)で論じたので参照されたい。

⁷ 例えば、筆者のゼミナールでは、「けれども、、、」という表現は文意が逆説の場合にだけ使うこと（そうでない場合には使わない）、「チョウ（超）、、、」という表現の多用は品位を落とすので避ける、「どうも、どうも。」ではなく「どうもありがとう。」「どうもすみませんでした。」などと表現する、「、、、とか。」で終わる文章は文章として成立していないので使わない、話ことばは必ず「、、、です。」または「、、、ます。」で終わるようにする、などの指導をしている。

上述したようにパワーポイントよりも板書の方が優れた面を多く持つと同様、インターネット上の資料掲載にない長所を持つ。

ただ、配付資料の作成においては、単に「資料を適当にコピーして配布すれば良い」のではなく、細心の注意を払うべきことが幾つかある。それは、当該科目の資料としての統一性、利用者（学生）にとっての見やすさと使いやすさ、である（第4章の原則3として後述）。

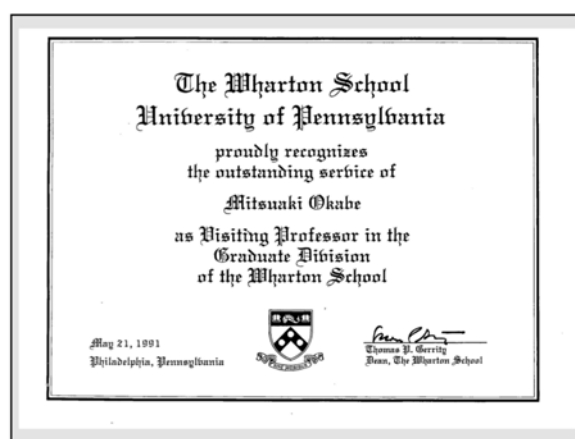
(3) 義務づけか、インセンティブ活用か

望ましい大学教育を行うに際しては、ルールを作りそれを遵守させるという方式が良いのか、それとも教員ないし学生のインセンティブ（行動動機）への依存ないし強化を図る方式が良いのか。この選択は、広くいえば社会における問題対処ないし公共政策のあり方にも通じる制度設計の問題である⁸。教員の場合、学生の場合、それぞれにつき幾つか例を挙げておこう。

まず、教員が良い大学教育を行うように仕向ける仕組みは幾つかある。一つ目のアイデアは、学部として「優秀教員賞」(Best Teacher Award)を創設することである。例えば、それに該当する教員を毎学期1～2名選出し（そのためには学生による授業評価の得点を活用できる）、その教員を学部長が表彰する（表彰状および金一封を贈る）ことが考えられる。そして該当教員の氏名を学部掲示板にも掲出する（そして学部ウェブサイトにも公表する）ことにすればよい。この制度は、現に慶應義塾大学SFCにおいてその創設当初活用されていた（近年はなぜかそれが停止されている）。また、筆者がかつて教壇に立った米国ペンシルバニア大学ではその制度があり、筆者は幸いにもその恩恵に浴したことがある（**図表7**、**図表8**）。



図表7



図表8

⁸ それは、命令と統制による方式 (Command and control approach) と動機整合性を持つ方式 (Incentive-compatible approach) という区分けに対応する (岡部 2006a : 34 ページ)。

二つ目のアイデアは、教員のFD取り組みを援助する仕組みを充実させることである。例えば、毎年3月に京都で開催される「FDフォーラム」(大学コンソーシアム京都が主催)に出席する場合、それを公務出張として大学が出張旅費等を全額負担することである。幸い明治学院大学では、そうした扱いがなされている⁹。

いま一つのアイデアは、学生の勉学インセンティブを高める方策を採ることである。その第1の例は、学生が達成した良い側面を取り上げてほめることの大切さである。これは筆者の学生時代の経験からいえるだけでなく、これまで20年間授業やゼミナールを担当した経験から確かなことでもある(岡部 2009: 2001-205ページ)。人は、努力して良い結果を挙げた場合、それが他人によって褒められれば大きな力を出す。

第2の例として挙げられるのは、授業において学生との質疑応答を促進するため、筆者は学生が挙手して質問する場合であれ、筆者が質問して学生がそれに答える場合であれ、その学生には「ボーナス点を1点与える」というルールを設定していることである。このルールに従えば、学期中仮に10回挙手して発言すれば成績が10点追加されるのでかなりの動機づけになる。現にその効果が多少ながら認められる。

第3の例は、ゼミナール論文あるいは卒業論文のうち特に優秀な作品を表彰する制度である。これは比較的多くの大学で導入されている制度かもしれないが、重要な点は、該当論文名とその筆者名を公示するだけでなく、論文ないしその概要自体を印刷物として公開するか、ウェブ上で公開することによって、一般大衆にその中味が見られる形にすることである。慶應SFCでは20年前からその制度があり、筆者はゼミ生の優秀論文をその制度に則して積極的に公開することを心がけてきた(その一例は図表9)。その結果、SFC在職中に印刷され公刊されたゼミ優秀論文(ウェブ上でも全文が公開されている)¹⁰は、合計50編を数えるに至っている。また明治学院大学では、ゼミナール毎に原則毎年1編、優秀卒業論文を選定し、その概要を学部ホームページ上でほぼ恒久的にウェブ公開する制度を設けている¹¹。これらの制度が定める優秀論文として選出されることは、学生にとって将来に亘って大きな名誉になるので、良い論文を書くための動機づけになっているようにうかがわれる。

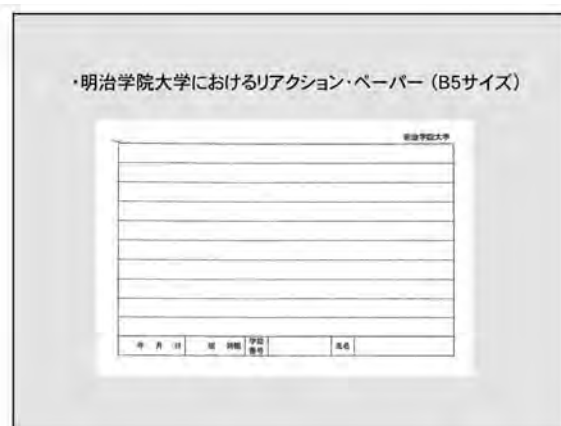
⁹ 筆者もこれまで何度かその恩恵に浴している。

¹⁰ <<http://www.okabem.com/paper/index.html>>

¹¹ <<http://fis.meijigakuin.ac.jp/ks-j/experience/article>>



図表 9



図表 10

(4) 期末テストか、レポートか

学生が授業に毎回出席することは、大学教育にとって最も重要な前提条件である。それを確実にするために教員は何をするべきか。伝統的にはいうまでもなく期末テストの実施による学力確認がある。それ以外に最も一般的に行われているのは、毎回、ないし不規則なタイミングで学生の授業出席を取ることである。ただ、そうした場合、学生にとって出席すること自体が目的化する難点がある。

この問題を避けるには、小さな用紙（リアクションペーパー）を配布し、当該時限の授業内容（評価、感想、あるいは設問に対する解答）を書かせるという方式がある。明治学院大学では、教員の判断によりこれを用いることができる（図表 10）。なお、最近では携帯電話ないし学生が持参するコンピュータに学籍番号などの必要情報を入力することによって授業時間中に出席を取るという新方式を採用している例もみられる。そうすれば、確かに出欠の事務処理は効率的になるが、学生が「筆記用具を用いて文字を手で書く」という大きな意味を持つ動作が欠落することになる点が問題ではないかと筆者は考えている。

出欠を取ることと授業内容の理解促進を同時に達成する方法もある。それは、例えば授業内容の理解を確認するための平易な小レポートを学期中に数回提出させることによって可能である。そうすれば、出席状況が把握できるとともに、授業内容を理解させることにも資することになる¹²。

なお、レポートとタームペーパー（term paper、学期論文）は、時には同一視される場合もあるが、その性格や執筆の狙いが異なることを教員も熟知した上で両者を使い分けるのが適当であろう。一般的にいえば、レポートは学生の勉強支援手段であるのに対して、タームペーパーは小さいながらも研究論文である。したがって、大学教育にとって本質的に重要な

¹² 筆者はこの方法を採用している。

訓練は、後者の執筆を通してこそ可能となる。なぜなら、研究論文の性格を持つタームペーパーを書く場合には、用語を明確に定義すること、論文の構造を明確に構築すること、出典を明示する原則を身につけることなど、知的作業における多くの基本事項を習得させる必要があるからである¹³。

(5) 教育か、研究か

大学教員に対して最も頻繁に出される質問は、主たる責務は教育か、それとも研究か、という問いである。むろん、大学の性格や研究分野などによって差異があるものの、筆者は良い教育（とくに学生自身に向上心を育む教育）のためには教員自身が研究に打ち込んでいることが大学教育の基本前提である、と考えている。

これは、研究だけでなく学部教育を最重視する点で他の著名大学と異なる名門プリンストン大学¹⁴の多くの教員に共通する考え方である。事実、同大学の特徴を綴った書物（McLeery 1986）においては「大学において最も重要な学生は教員自身であり、もし教員自身が学び続け、成長し続けていなければ、誰も学び成長することはできない」と喝破されている。また、筆者の経験に照らしても「学生は教員の背中を見て育つ」という感想を強く持っている。ちなみに、慶應SFC在籍時に岡部ゼミ在籍学生が執筆したタームペーパー（ゼミ優秀論文）を大幅に加筆修正したうえでゼミ生と筆者の共著論文に仕立て直し、最終的に日本金融学会で発表した論文が3編ある。これは、教員が本格的な研究を行うこと（その努力をしていること）こそ学生を育てる条件であることを示す例だといえるのではなかろうか。

4. より良い授業のために—その一例としての筆者の五原則

では、より良い授業をするには、具体的にどのような方法があるだろうか。ここでは、筆者がこれまでの経験（組織における勤務、国内外の大学における研究教育経験）を踏まえて自分の授業スタイルにおいて「五原則」としていることがらを一例として述べることにしたい。むろん、これが模範的な例というつもりはなく、できるだけ具体的に示した方が理解しやすいという観点から以下記述するものである。

これまでに筆者が国内外の大学で担当した科目やそのクラス規模は様々であるが、いずれの場合でも学生に(a)基本概念を確実に理解させる、(b)ものごとを整理して考える習慣をつけさせる、(c)書く力と話す力を磨かせる、ことを達成することが基本だと考えてきた。以下

¹³ 詳細は、岡部（2011a：3部3章および4章）を参照。

¹⁴ プリンストン大学は、ハーバード大学と並んで全米ランキングが例年トップに位置する大学である（*US News and World Report*によるランキング）。ちなみに、2011年度ノーベル経済学賞は同大学のクリストファー・シムズ教授が受賞した。

は、そのために工夫して到達した5つの原則である。

原則1: 授業の冒頭で学生諸君にあいさつの言葉

「みなさん、おはようございます。今日は富士山が見事な姿を見せてくれていますね。皆さんを励ましているようです。さて本日の授業は・・・」(季節の言葉)

→ ・学生諸君と私の気持ちの一体化
・勉強モードへの切り替え

図表 1 1

原則2: 黒板の左端に当日の講義目次。そして板書を最大限、かつ系統的に活用

■当日の講義「目次」の板書例(日本経済論):

格差問題(1)―所得格差と政策課題

1.格差の意味と動向
2.所得格差拡大の要因
3.政策課題

図表 1 2

第1の原則は、授業の冒頭で学生諸君にあいさつの言葉を述べることである(図表11)。「みなさん、おはようございます。今日は富士山が見事な姿を見せてくれていますね。皆さんを励ましているようです。さて本日の授業は・・・」といった風に季節のことばを述べることから授業を始める。これは学生諸君と筆者が気持ちを一体化するとともに、勉強モードに切り替えるうえで大切だと考えているからである。

第2の原則は、黒板の左端に当日の講義目次を書く一方、板書を最大限かつ系統的に活用することである(図表12)。例えば、現在担当している日本経済論の場合、当日のテーマとして「格差問題(1)―所得格差と政策課題」とまずチョークで書き、その下に3~5つの見出し項目を番号を付けて書き添える。この板書は授業ベルが鳴る前に教室に入って行い、講義開始後は話しつつある項目の番号を○で囲んで示すことにしている。これは、当日の講義内容とその構造ならびに進捗状況を明確にするための配慮である。学生にとっては、当日の講義構造を頭に入れた上で聴講することが整理の行き届いた理解にとって不可欠である。

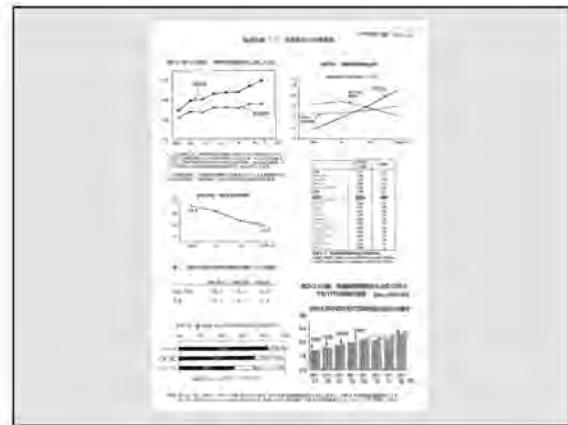
そして講義は、かなり徹底した板書を基礎に進めることにしている。黒板には単に用語やポイントを書くだけでなく、基礎概念などはその定義の文章自体を書くことにしている。高校での授業を彷彿とさせるかもしれないが、これは学生諸君が自らの手でノートに「書く」という行為が理解を深めるうえで重要だという考えによるものである。また板書に際しては「黒板の空きスペースに適宜書く」というのではなく系統的に(上から下にそして左から右に)書くことをとりわけ重視している。これは筆者が最初に大学の教壇に立った時から原則としていることである(前出の図表7を参照)。こうした形式で授業を行うと、終了後には全身チョークの粉を浴びて教室を出る感じになる。なお、大学の授業でも今やスクリーン(パワーポイント)の活用が大流行しているが、筆者はそれを使わずあくまで板書主義を採って

いる理由は前述したとおりである。

原則3: 毎回 A4用紙1枚の補助的資料を配付

- ・ 講義内容のレジメではない (関連する図表や統計を4~5件表示。ていねい過ぎるレジメの配布は逆効果)
- ・ 用紙をA4サイズ(それをタテに使用)で統一。それを毎回1枚 (1枚のみ)。
- ・ 二つの留意点
 - a) 図表はできるだけ見やすいものにする(原資料を拡大あるいは縮小。また不要情報はそぎ落として整頓)
 - b) 資料の右上方に授業名と通し番号を付す(前掲)

図表 1 3



図表 1 4

第3の原則は、毎回 A4用紙1枚の補助的資料を配付することである (図表 1 3)。これは講義内容のレジメではなく、関連する図表や統計を1回の講義につき4~5件 (各種資料からの転載ないし自作の図表) を選び、それらを1枚の用紙に配列したものである (図表 1 4)。講義では、議論の根拠や統計的裏付けを示す必要があるため、その板書時間を節約することがこの配布資料を作る主な目的である。

むろん、こうしたコピーを随時配布することはどの教員も行っていることではあるが、筆者の場合とくに3つの点に配慮している (前出の図表 1 4)。第1は(a)用紙をA4サイズ(それをタテに使用)で統一すること、(b)それを毎回1枚作ること、そして(c)そこに入れる図表はできるだけ見やすいものにする (原資料を拡大あるいは縮小する、不要情報をそぎ落とすなど) である。第2は、資料の右上方に例えば「日本経済論 (岡部・2011秋) 3」といった具合に、授業名や配付資料の通し番号を小さい活字で入れることである。第3は、この用紙に採録した資料や図表の出典を用紙下方に必ず明記することである。この3つの配慮をすることによって履修者は配布資料の整理と活用がしやすくなるからである。

原則4: 学生との質疑応答の促進

- ・ 米国の大学 (あるいは現在担当の留学生中心のクラス) では格別の苦勞なし。しかし、日本の学生は消極的。
- ・ 私の質問に対して解答した場合、学生が挙手して質問した場合、いずれも「ボーナス点を1点付与」というルールを設定。学期の最終授業で合計回数を自己申告させ、期末試験の得点に加算

→ 若干の効果あり

図表 1 5

原則5: 授業の前日と当日の計2回、講義のリハーサルを実施

- ・ 最初米国の大学で授業を担当した頃からの習慣
- ・ 授業「前日」には講義ノートの手直し、配付資料の準備、第1回目のリハーサル
- ・ 授業「当日」は講義ノートの最終的な黙読予習。そして「いざ、出陣」という気合い

図表 1 6

第4の原則は、学生との質疑応答を促進することである（図表15）。米国の大学（あるいは米人学生が大半を占める現在の英語講義クラス）では、学生はこちらから質問をしなくとも講義中に挙手して積極的に質問してくるので格別の苦労はない。しかし、日本人学生にはそういう態度があまりみられない。このため筆者は、学生が挙手して質問する場合であれ、筆者が質問して学生がそれに答える場合であれ、その学生には「ボーナス点を1点与える」というルールを設定し、それを学生に告知している。このルールに従えば学期中、仮に10回挙手して何らかの発言をすれば成績が10点追加される（学期最終授業で合計回数を自己申告させる）のでかなりの動機づけになる。現にその効果が多少とも認められる。ただ、それでもなお、もっと活発に質疑応答する場面が増えてもよいというのが正直な感想ではある。

こうした質疑応答は、授業担当者が講義内容を本当に深いところから理解できているかどうかを試される機会（場合によっては新しい研究テーマが示唆される機会）でもあり「教えることは学ぶことである」ことを思い知らされる¹⁵。

第5の原則は、授業の前日と当日の計2回、講義のリハーサルを行うことである（図表16）。最初米国で（むろん英語で）授業を担当した頃は、講義1回分のノート作成に数日かかったうえ、授業当日は自分の研究室で声を出してリハーサルを行うことに1時間内外を充てる必要があった。しかし、その後は同一科目を繰り返すかたちになるので今ではそれを20分程度に短縮できている。ただ、それでも講義前日には講義ノートの手直しや配付資料の準備を全て終えるとともに第1回目のリハーサルを自分の研究室で行う。そして授業当日は、講義ノートの最終的な黙読予習をし、その後で「いざ出陣」と自分に言い聞かせて教室に向くことにしている。

米国ペンシルバニア大学で最初に担当した授業（週2コマ）は概ね上記の方式で対応したため、自筆の講義ノートを約500枚も書く結果になったが、幸い履修者による授業評価では学部全科目平均をかなり上回る評点をもらうことができた。この経験を踏まえて筆者は、学部初級の授業であれ大学院の授業であれ、今ではすべて上記のやり方で臨んでいる。それ以外にも、例えば息抜きのための気のきいた挿話を毎回準備するなど、なお改善を続けている。

5. 結語

思えば、大学教員は一般の社会人よりも格段に多く教育を受ける機会を与えられてきてい

¹⁵ 筆者が米国で初めて教壇に立って企業金融について講義をしていた時に学生からある質問を受けた——「いま説明のあった実務に合致したペッキング・オーダー（利用資金優先順位）理論は、純粹理論において基本となっているモジリアーニ＝ミラーの理論命題とどういう関係にあるのか」と。筆者は絶句せざるをえなかったが、数日考えたうえでやっとこれにきちんと回答した。

る。「多く与えられた者は誰でも多く求められ、多く任された者は、更に多く要求される。」
といういにしえの言葉がある。大学教員は、この言葉を肝に銘じてその職責を果たしてゆく
べきだと考える。

以上

[参考文献]

岡部光明 (2000) 『大学教育とSFC』西田書店。

岡部光明 (2005) 「米国プリンストン大学における学部教育について: その理念・制度的特徴・SFC への示唆」、慶應義塾大学湘南藤沢学会 リサーチメモ、RM2004-12。

<<http://www.okabem.com/book/princeton.html>>

岡部光明 (2006a) 「伝統的『政策』から社会プログラムへ」、大江守之・岡部光明・梅垣理郎 (編) 『総合政策学—問題発見・解決の手法と実践—』慶應義塾大学出版会。

岡部光明 (2006b) 『私の大学教育論—慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスでの実践—』慶應義塾大学出版会。

岡部光明 (2009) 『大学生へのメッセージ—遠く望んで道を拓こう—』(日本図書館協会選定図書) 慶應義塾大学出版会。

岡部光明 (2011a) 『大学院生へのメッセージ—未来創造への挑戦—』慶應義塾大学出版会。

岡部光明 (2011b) 「効果的なパワーポイント・プレゼンテーション—理論的基礎と実践的提案—」、慶應義塾大学湘南藤沢学会ディスカッションペーパー SFC-DP2011-001 年。

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp_list2011.html>

[明治学院大学『国際学研究』41号、2012年3月刊行、に掲載予定]

岡部光明研究会 (慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス) 優秀論文 (1994年度~2007年度)

<<http://www.okabem.com/paper/index.html>>

金子元久 (2007) 『大学の教育力—何を教え、学ぶか—』ちくま新書 679、筑摩書房。

大学コンソーシアム京都(2011) 『2010年度 第16回FDフォーラム報告集: 組織的FDの取り組み~FD義務化から現在(いま)~』公益財団法人 大学コンソーシアム京都、6月。

明治学院大学国際学部 優秀卒業論文 (2000年度~2010年度)

<<http://fis.meijigakuin.ac.jp/ks-j/experience/article>>

文部科学省中央教育審議会(2008) 「学士課程教育の構築に向けて (答申)」12月。

<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm>

McLeery, William (1986) *Conversations on the Character of Princeton*, Princeton University Press.